様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０２４９８

研究課題名（和文）リメディエーションによる文化的記憶形成とその教育的活用に関する歴史的・体系的研究

研究課題名（英文）Cultural Memory through Remediation and Its Pedagogical Using from the Historical and Systematic Perspective

研究代表者
山名　淳（Yamana, Jun）

東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・教授

研究者番号：８０２４００５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、集合的な記憶と想起に関する学際的研究（メモリー・スタディーズ）の成果蓄積に注目しつつ、教育学と架橋の試みによって「記憶の教育学」を構築しようとする試みの一環である。具体的には、広島の原爆投下に関する記憶継承の問題に焦点を当てて理論的考察を行い、それをもとにして「次世代と描く原爆の絵プロジェクト」およびその演劇化の解釈を試みた。そこで浮上したのは、現代における新たな「リメディエーション」（＝様々な媒体を通じた記憶伝承の変容）の現象の解釈を行った。証言者不在の時代を目前にした今日において、教育を通して未来の人びとに向けた文化的記憶を共同構築を行う可能性およびその際の課題について検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
集合的記憶論は多様であるために全体像を把握することが難しい。そうしたなかで、本研究はこの分野に関するドイツの包括的な理論書の邦訳作業を通して、メモリー・スタディーズの基礎を確認することから始めた。本研究の学術的意義は、そのことを通してより確実に記憶研究のうちに教育学を位置づけたことにある。また、そのような研究活動を通して、とくに日独を中心した国際的な共同活動のネットワークを築くことができた。さらに、本研究はとくにカタストロフィの集合的記憶と向き合う教育現場の活動（防災教育、平和教育、環境教育等）を理解し、また改善するための示唆を含んいる。その点に本研究の社会的意義を見出すことができる。

研究成果の概要（英文）：This research project is part of an attempt to construct a "Memory Pedagogy" by bridging educational studies and memory studies. Specifically, the research project focused on the transmission of memory regarding the atomic bombing of Hiroshima. Based on the theoretical consideration of Memory Studies, the educational project "Pictures of Atomic Bomb" and its theatricalization were interpreted as the phenomenon of new "remediation" (i.e., the transformation of collective memories through various media) in the present era. In the age of witness-lessness regarding the Second World War, I explored the possibility of co-constructing cultural memories for future generations through education.

研究分野：教育学

キーワード：教育　集合的記憶　文化的記憶　想起文化　リメディエーション　ビルドゥング　メモリー・スタディーズ　記憶の教育学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

20 世紀における最後の四半世紀辺りから「記憶ブーム」（A.ヒュイッセン）とでも呼ぶべき状況があると指摘されて久しいが、その傾向は今日に至るまで続いているといえる（Erll 2017）。グローバル化社会において「境界線を越える」ことが試みられる機会が増加すると同時に〈他者〉と居合わせることがますます増えているようにみえる現在、これまで社会や歴史の「真実」とみなされてきたものを、特定の立地点からの「記憶」として相対化して捉えようとする試みが、様々な理論領域や実践領域でなされている。また、個人や社会の記憶に影響を与える情報メディアの飛躍的な発展や操作技術の進化によって、そのような傾向はさらに強まっている。教育は文化伝達をその重要な機能として請け負っており、そのかぎりにおいて「記憶」という主題と密接にかかわっているが、教育学は学際的な「記憶」研究の隆盛を十分に受容しているとは言い難い。

教育学が学際的な「記憶」研究と接続することによって何が目指されるのか。本研究のねらいは、カタストロフィ（個人とそれを取り巻く環境の破綻）の記憶を伝えることを目的とする教育の解釈と実践を促進することにあった。とりわけ人間と文化の問題を大きく問い直す契機となった第二次世界大戦をめぐる記憶を伝達するという課題は、戦後70 年以上が経過した現在、大きな転換期にさしかかっているといえる。というのも、戦争に関するコミュニケーション的記憶（体験者の語り継ぎによる集合的記憶）から文化的記憶（ミュージアム、モニュメント、映像、式典等のような人工的な仕掛け、またそれによって喚起される記憶）への架橋を余儀なくされているからである。

２．研究の目的

本研究では、以上のような問題関心をもとにして、記憶と想起に関して最も活発に議論を展開している文化科学におけるメモリー・スタディーズの研究蓄積に注目しつつ、広島における原爆投下に関する事例を中心として、被爆証言者不在の時代を目前とした現代において新たな「リメディエーション」（＝様々な媒体を通じた記憶伝承の変容）が形成されている現象の検討を試みた。具体的には広島市で実施されている「次世代と描く原爆の絵プロジェクト」およびその演劇化を主たる考察対象として、活動の動向とそれにかかわる人びとの意識を調査するとともに、広島の「リメディエーション」の歴史におけるこうした活動の意義を検討した。本研究の主たる目的として、(1)集合的記憶論と教育学とを架橋する際の理論基盤を構築すること、(2)そのような理論を土台にして具体的な考察の事例を提示すること、また（3）上記の調査に関する国際的および学際的な研究協力体制の基礎を築くこと、の三点を挙げることができる。

３．研究の方法

三つの研究目的に則して、次のような方法によって具体的な研究活動を行った。

(1)　集合的記憶論と教育学とを架橋する際の理論基盤を構築するために、アストリッド・エアル氏による集合的記憶論の著作（『集合的記憶と想起文化』原典は 2017 年刊行）を翻訳し、そ

の内容について詳細な検討を行う。なかでも、本研究の重要概念である「リメディエーション」に関する理論を集中的に習得する。

(2)　そのような理論を土台にして、「原爆の絵」プロジェクトおよびその演劇化について分析を試みた。とくに集中的に考察を行った演劇化の試みについては、具体的には以下のような方法で研究を進めた。

・研究の準備：インタビュー調査に先立って、青年劇場本部およびインタビュイーに調査に関する説明を行い、同意を得た上で調査を開始する。調査者は、すでに①複数回にわたって「あの夏の絵」を鑑賞し、②その舞台稽古および地方巡業の様子を観察し、③また脚本家1名および俳優1名に対して事前インタビュー調査を行い、本調査の準備を整えてきた。

・資料等の入手方法：演劇「あの夏の絵」に登場する俳優6名を二つのグループ（グループA：高校生役3名、グループB：証言者役および教師役の3名）に分け、それぞれおよそ90分程度の半構造化インタビューを実施する。新型コロナウイルス感染症予防の観点から、インタビューはオンライン形式で行う。

・入手後の資料等の解析方法：インタビューの録画ビデオを観察すると同時に、同ビデオから文字起こしを行い、その内容をリクールによるミメーシス論を理論的基盤として解釈および分析を行う。

(3)　上記の調査に関する国際的および学際的な研究協力体制の基礎を築く。

４．研究成果

具体的な成果として、以下を挙げることができる。

(1) 演劇「あの夏の絵」で演じている俳優たちがカタストロフィの記憶を伝承する活動を舞台上で再構成する活動を分析した（Yamana, Jun (2023), Transiting Representations of the Memory of the Hiroshima Bombing: Remediation as a Form of Intergenerational Boundary Crossing, *Educational Studies in Japan,* Vol. 17. (in print)）。俳優たちへのインタビュー結果に基づくならば、この課題を克服するための方略として、少なくとも①脚本というメディアへの潜心、②他のリプリゼンテーションの参照、③諸場面のオーセンティックな場所に身を置くこと、④関係する人びととの交流、⑤稽古によるパフォーマンスの「一体化」、⑥舞台上での人間関係の構築、⑦台詞の身体への馴染ませること、⑧「慣れ」への抵抗と一回性の維持、といったことを暫定的に抽出することができた。俳優たちは第一フェイズ（①）、第二フェイズ（③④）、第三フェイズ（⑤⑥⑦⑧）を行き来しながら演劇におけるパフォーマンスを準備していることがわかった。むろん、さらにそれ以外のリプリゼンテーションも参照されたいたこと（②）も忘れられてはならない。カタストロフィの記憶を伝える演劇を準備するために俳優たちが想像以上に複雑な活動を行っていることが確認できた。

(2) 以上の考察を行う過程で、集合的記憶に関する理論の検討を行った。集合的記憶論に関する主要文献を邦訳することを通して（エアル, A. 『集合的記憶と想起文化――メモリー・スタディーズ入門』（山名淳訳）、水声社、2022 年）、この方向での理論に関する学際的な情報の提供に貢献することができた。同時に、「原爆の絵」プロジェクトの分析にとって重要な理論枠組みを獲得することができた。同プロジェクトを考察対象として、世代間での対話を通して形成されるカタストロフィのコミュニケーション的記憶）の生成過程について、またそれを超えた文化的記憶が形成されていく過程について、より包括的な現象の解釈を行った。

(3) 集合的記憶論と教育学を架橋した場合、どのような具体的な議論の展開が可能であるかを、

主として教育哲学の領域における研究者たちとともに研究会を重ねて、その成果を公にすることができた（山名淳編『記憶と想起の教育学――メモリー・ペダゴジー、教育哲学からのアプローチ』勁草書房、2022 年。

(4) カタストロフィの記憶を伝えようとする教育に関する可能性と課題について国際会議において報告を行った。2022 年度韓国教育哲学会における国際シンポジウムはそのうちの一つである（Yamana, Jun, Memory Pedagogy in the Context of International Research Exchanges: The Story of My Interest in this Theme, 2022 Annual Conference of KPES "A Pedagogy of 'Touching' in the Viral Era: Rethinking Teaching and Learning" Round Table 2: The Future of East Asian Philosophy of Education: Doing Research from the Post-Colonial Perspective, Seoul National University, Korea, November 26, 2022）。ドイツ人研究者たちとの国際研究会にも参加し、その成果がすでに英語で公にされている（Wigger, Lothar / Dirnberger, Marie (eds.), Remembrance - Responsibility - Reconciliation: Challenges for Education in Germany and Japan, J.B. Metzler: Stuttgart (Yamana, Jun, Encountering Absurdity through Theater: An Essay on Remembering and Education about the Atomic Bomb in Hiroshima, 2022, pp. 157 – 167)。

(5) カタストロフィの記憶継承に関連するテーマ（日本カリキュラム学会第 32 回シンポジウムにおける「平和教育」シンポ、令和 3 年度防災教育推進セミナーにおける災害の記憶継承に関するレクチャー等）について、教育学内におけるシンポジウムやコロキウムで報告を行った。また教育学以外の領域とも積極的にコミュニケーションをとり（SHIRAKAWA WEEK2020 における若者と震災の記憶に関するワークショップ、「アジアの災禍とアート」研究会における災害の記憶とアートに関するワークショップ）、今後の考察の広がりについて検討を行った。

(6) 集合的記憶と教育学を架橋して研究を推進していく国際的な協力体制を構築することができた。アストリッド・エアル氏（フランクフルト大学）、ヴォルフガンク・メゼーツ氏（フランクフルト大学）、マルクス・リーガー＝ラーディッヒ氏（テュービンゲン大学）、ローター・ヴィガー氏（ドルトムント工科大学）らがその中心的な研究者となる。本研究期間中に韓国や台湾の研究者たちとも研究交流を開始した。今後は、そのようにアジアとヨーロッパの間での学術コミュニケーションも発展させていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山名　淳	４．巻 30
２．論文標題 記憶の教育学の構築に向けて――その理論と実践	５．発行年 2022年
３．雑誌名 三田教育学研究	６．最初と最後の頁 4-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yamana, Jun	４．巻 17
２．論文標題 Transiting Representations of the Memory of the Hiroshima Bombing: Remediation as a Form of Intergenerational Boundary Crossing.	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Educational Studies in Japan	６．最初と最後の頁 in print
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 山名　淳	４．巻 31
２．論文標題 カタストロフィの想起文化と教育――〈メモリー・ペダゴジー〉から平和教育を考える	５．発行年 2022年
３．雑誌名 カリキュラム研究	６．最初と最後の頁 50-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yamana Jun	４．巻 52
２．論文標題 Catastrophe, commemoration and education: On the concept of memory pedagogy	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Educational Philosophy and Theory	６．最初と最後の頁 1375-1387
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00131857.2020.1773795	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山名　淳	4．巻 87
2．論文標題 書評　矢野智司『歓待と戦争の教育学』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『教育学研究』	6．最初と最後の頁 245-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山名　淳	4．巻 121
2．論文標題 司会によるコメントと討議の総括（研究討議　HIROSHIMAという記憶の継承と和解）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『教育哲学研究』	6．最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yamana, Jun	4．巻 5
2．論文標題 Educational Theory of “Hiroshima” after the “Memory Turn”: Summary of the Symposium and Moderator’s Comments	5．発行年 2020年
3．雑誌名 E-Journal of Philosophy of Education: International Yearbook of the Philosophy of Education Society of Japan	6．最初と最後の頁 52-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 ヴィガー,L.　（山名淳訳）	4．巻 63
2．論文標題 記憶・想起と人間形成	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6．最初と最後の頁 167-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山名淳	４．巻 121
２．論文標題 司会によるコメントと討論の総括（研究討議　HIROSHIMAという記憶の継承と和解）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教育哲学研究	６．最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　12件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Yamana, Jun
２．発表標題 Memory Pedagogy in Japan: Repraesentation und Uebersetzung von Erinnerung am Beispiel des Projekts "Gemaelde der Atombombe" in Hiroshima.
３．学会等名 Johann Wolfgang Goethe Universitaet Frankfurt, Germany, 14.02.2023.（Eberhard Karls Universitaet Tuebingen, 16.02.2023.）（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山名　淳
２．発表標題 記憶を〈かたち〉にする――「原爆の絵」プロジェクトから考える〈厄災ミュージアム〉の課題と展望
３．学会等名 アジアの災禍とアート、アクション勉強会、2023年3月18日、仙台フォーラス（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Yamana, Jun
２．発表標題 What is Memory Pedagogy?
３．学会等名 Educational Philosophy Lecture at Inha University, Korea, November 29. 2022.（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yamana, Jun
２．発表標題 Memory Pedagogy in the Context of International Research Exchanges: The Story of My Interest in this Theme.
３．学会等名 2022 Annual Conference of KPES "A Pedagogy of 'Touching' in the Viral Era: Rethinking Teaching and Learning" Round Table 2, Seoul National University, Korea, November 26, 2022.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山名　淳
２．発表標題 二重の多声性と「翻訳」の場としての国語教育――カタストロフィの想起物語と教育を架橋する試み
３．学会等名 第143回全国大学国語教育学会年次大会ラウンドテーブル「国語科教育と教育哲学――探究的な対話をどう実現するか、2022年10月16日、千葉大学
４．発表年 2022年

１．発表者名 山名　淳
２．発表標題 カタストロフィの想起文化と教育――〈メモリー・ペダゴジー〉モデルから平和教育を考える
３．学会等名 日本カリキュラム学会第32回大会シンポジウム「新しい時代を切り拓く平和教育のあり方について」（2021年6月26日、琉球大学、オンライン形式）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山名　淳
２．発表標題 災害記憶の継承に関する理論的課題 ――〈伝える〉ことと教育の間を考える
３．学会等名 令和3年度防災教育推進セミナー（2021年8月20日、独立行政法人教職員支援機構、オンライン形式）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山名　淳　他
２．発表標題 伝達と創造――「原爆の絵」プロジェクトを通して想起と想像を考える
３．学会等名 教育思想史学会第31回大会コロキウム３　（2021年9月6日－13日、立教大学、オンライン形式）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山名　淳
２．発表標題 記憶の教育学――その理論と実践
３．学会等名 三田教育学会研究会（2022年3月12日、慶應義塾大学、オンライン形式）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山名　淳
２．発表標題 カタストロフィの想起文化と教育――〈メモリー・ペダゴジー〉モデルから平和教育を考える
３．学会等名 日本カリキュラム学会第32回大会シンポジウム「新しい時代を切り拓く平和教育のあり方について」（2021年6月26日、琉球大学、オンライン形式）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山名　淳
２．発表標題 カタストロフィ表現の〈空白〉とどう向き合うか ーー想起文化の10年から100年への途上で
３．学会等名 SHIRAKAWA WEEK 2020（福島県白河市シンポジウム）「復興・創生を背負わされてきた子どもたちの現在と未来」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山名　淳
２．発表標題 翻訳者としての教師――「集合的記憶」論から考えるコーディネート時代の学校教育
３．学会等名 2020年度島根大学現職教員研修シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yamana, Jun
２．発表標題 Catastrophe Museum as Educational Institution of Cultural Memory: The Case of the Great Hanshin-Awaji Earthquake of 1995 from the Perspective of Memory Pedagogy.
３．学会等名 Third Annual Memory Studies Association Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yamana, Jun
２．発表標題 Encountering Absurdity through Theater: An Essay on Remembering and Education of the Atomic Bomb in Hiroshima.
３．学会等名 Remembrance, Responsibility, Reconciliation: New Challenges for Education in Germany and Japan（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山名　淳
２．発表標題 研究討議　HIROSHIMAという記憶の継承と和解　司会コメント
３．学会等名 教育哲学会第62回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山名　淳
２．発表標題 厄災を表現すること――「原爆の絵」プロジェクトにおけるコミュニケーション的記憶と文化的記憶
３．学会等名 2019年度神戸市外国語大学魅力発信事業「原爆を記憶する――「文化・メディア・教育」（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計4件

１．著者名 山名淳編	４．発行年 2022年
２．出版社 ―	５．総ページ数 89
３．書名 伝達と創造――「原爆の絵」プロジェクトを通して想起と想像を考える（教育思想史学会第31回大会コロキウム3報告書）	

１．著者名 Kato, Morimichi (eds.)	４．発行年 2020年
２．出版社 Educational Philosophy and Theory	５．総ページ数 16
３．書名 Philosophy of Education in a New Key: Voices from Japan. (Yamana, Jun, Crossover between Memory Pedagogy and Research on History of Pedagogical Ideas on Catastrophes, pp.11-12.)	

１．著者名 Lothar Wigger / Marie Dirnberger (eds.)	４．発行年 2021年
２．出版社 Verlag J.B. Metzler	５．総ページ数 187
３．書名 Remembrance - Responsibility - Reconciliation. New Challenges for Education in Germany and Japan. (Yamana, Jun, Encountering Absurdity through Theater: An Essay on Remembering and Education about the Atomic Bomb in Hiroshima, 2022, pp. 157 - 167.)	

１．著者名 岡室美奈子監修・飛田勘文	４．発行年 2019年
２．出版社 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館	５．総ページ数 96
３．書名 『コドモノミライ--現代演劇とこどもたち』（山名淳「演劇を通して不条理と出逢うこと――朗読劇「夏の雲は忘れない」に教育を想う」、88-93頁）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関